

震災の教訓を後世に伝えるために 仙台でシンポジウム



 [Movie]

震災から10ヶ月、この記憶を、いかに未来につなげるかという取り組みも本格化しています。東日本大震災の記録を伝え継ぐための活動をしている団体が意見の交換をする、国際シンポジウムが仙台で開かれました。東北大学とアメリカ・ハーバード大学、そして、総務省が共同で開催した、国際シンポジウム。この中で、震災の記録を残そうとしている、行政機関や民間企業など14の団体が取り組み事例を報告した。今回の震災では、過去の災害の時と比べ、長期保存の実績が少ない、動画など、デジタルデータが非常に多くなっているのが特徴だ。このため、記録の保存には、従来と異なる手法が求められている。参加者からはそれぞれが得意とする記録媒体を使ったデータの保存方法に特化しながら連携を深めていくことが必要だとする意見が相次いだ。東北大学の今村文彦教授は「デジタルデータをどのように保存するのか、それとともにアナログ的な情報をどう有機的に結ぶのか、最後は活用が大事です。いかに復興、また日本の再生に向けて利用するのか、ここが大きなポイントになると思います」と話した。参加団体は、今後も定期的な情報交換を行い、記録保存に、共通の枠組みを設けるなどして連携を強化していくとしている。